



(財) 日本野鳥の会

新潟県支部報

'82年9月1日 No.14(夏・秋)

日本野鳥の会新潟県支部

〒959-44

新潟県東蒲原郡津川町

三郷 1193番地

渡部 通方

TEL 02549(2)5045

振替 新潟 1-6002

私のフィールド

ぼくの信濃川

六月の朝五時、家を出る。スズメ、カワラヒワ、ムクドリ、キジバトが、ぼくにオハヨウのあいさつをする。「オハヨウ」ぼくは姿を見つけると一羽ずつ声をかける。頭の上をゴイサギが田んぼの方に向かって「ガオゥ」と鳴きながら飛んで行く。

ぼくは信濃川河川敷に向う。長生橋の脇には、今年もオナガが巣を作った。二、三軒向うの赤い屋根の家には、コムクドリが桑の赤い実をセッセと運んでいる。運動広場の脇では今朝もホオアカが、ぼくを待っている。

オオヨシキリ、コヨシキリは、いつもの場所で、いつものように、にぎやかにさえずっている。川の浅瀬で、コサギ、ダイサギ、アオサギが、三、四十羽じっと足元の川の流れを見つめて、今朝のゴチソウを待っている。小石につまづいたり、魚に逃げられて大あわてしているものもいる。

「キュルキュル、キュルキュル」頭の上スレスレにコアジサシが降りてくる。「ゴメンネ、じゃまはしないから」朝露にぐっしょりぬれながら、ぼくはヨシをわけている。

「ギチギチッギチギチッ」オオヨシキリの、お父さんが、けいかい音を出す。「ぼくは友達じゃないか、わからないのかなあ」

コンラード・ローレンツ博士のように、ド

長岡市 塚越 大助 (小5年)

リトル先生のように鳥語が話せれば、きっと仲良しになれるのに、ぼくの知っている鳥語は警戒音やいかく音なんだから、とても友達と言えない。ヨシの向うの柳の木からアオジの金属的な声が聞こえる。コヨシキリもそろそろ巣作りがはじまる。一番大切な時だ。

そして八月――。

二日の大雨で下の堤防まで、すっかり水につかってしまった。ぼくの観察をしていたコヨシキリ達は無事だっただろうか。

一日の夕方、ぼくはとても不思議なことに



コヨシキリ

出あった。巣立ちを二日後位と見ていたのに、四羽いたヒナのうち、二羽はもう巣立っていた。そして巣の中には最初にふ化したヒナから二日おくれたヒナが一羽だけ残り、ぼくの目の前でもう一羽が親の声にさそわれて巣立っていった。残ったヒナは、ふ化した日を入れても、水がきた二日午後で十日目だ。

コヨシキリは水のくるのを知っていたのだろうか。今朝、ぼくはまだ泥の中を、巣をさ

がしにいった。巣のあたり一面ヨシが倒れて大きな木がいく本も流れついていた。巣は泥にうまっていた。

野鳥達は、自然の中で戦かって生きている。それをぼくは自分の目で見た気がする。

毎年同じ頃、鳥達は渡ってきて、そして帰って行く。何も変りのない出来ごとのように見えても、きびしい生活のあることをたかさんの人達に知ってもらいたいと思います。

ササゴイの住む川

南魚 六日町 山崎 拓雄

午前四時半。川面は一面に霧がたちこめて視界は悪い。土手をかけおりと、早くも遠方でゴイサギが飛び立つ。続いてオシドリ。身の丈を超すヨシの原をかきわけ、静かに、しかも急いで進む。全身草ついで雨をあびたようにぐっしょりになる。ともかく川岸に作っておいたブラインドに入る。

五時を少しまわると朝日がさしてくる。気温が上り川霧も少しづつ晴れてくる。

撮影の準備もととのった。さあ、運が良ければササゴイが姿を現す頃だ。

ササゴイ。こいつを見ていると自然とか、野生とか云った言葉がピッタリ当てはまる。私の見ている限りでは、単独かあるいは二羽である。ゴイサギのように群れないようだ。めったに鳴かないが、非常にかん高い声で、「キュー、と一鳴きする。ゴイサギのように続けて鳴かない。柳の高い木にも良く止る。もっとも川岸だから柳がだん然多いのだが。

水面近くの昆虫や雨蛙を食べるのは良く見かける。が、残念ながら魚を捕えたのは二度



しか見ていない。しかも、二度ともあの長いくちばしにツキ差し(写真)で捕えた。くわえそこねたのかどうかは定かでない。

目の前にササゴイを見ながら、七時になればあわて、帰宅しなければならない。ブラインドから体を乗り出すと、やっこさんも面白くなさそうに逃げ出す。ササゴイの住める川と私は時間が欲しい。

原稿募集 研究、観察、論説、随想、鳥だより、写真など。いつでも事務局へ

“ウソ”の問題

新潟市 風間辰夫

本年県内で一番話題となった鳥の話は、なんといっても“高田公園のウソ、”のことであろう。NHKの全国放送にはなるし、すべての新聞には大々的に報道されたことは、おそらく会員の皆さんも大いに関心を持ったことと思う。3年ほど前に千葉県下でシラサギ等の有害鳥獣駆除を実施し、1000羽ほど殺した中に、2羽のアマサギが殺されていたことで大問題となり、日本野鳥の会は環境庁に法律の改正をせまっている現況である。

本県の高田公園のウソ駆除についてはどのような経過であったか述べ会員皆さんの参考にしたいと思う。

ウソと桜の問題

御承知のようにウソと桜の問題は今に始まったことではなく、数10年前からである。長岡市、柏崎市、新津市等でも愛鳥家と花見家が、“けんけんごうごう、争った事実はまだ記憶に新しいことである。

ウソが桜の芽を全部食べてしまったため、本年の花見は、花でなく葉を見ることとなったとか“色々なことをいわれ、とにかく4～5月の花見の時期になると、本年はどうか？はてはウソを保護鳥にしておくのはまちがっているなどという論まで飛び出し、どうにもならない始末であった。

ウソは害鳥か

法的にはウソは害鳥とはならない。したがって有害鳥獣にはならないといえるのではないか。なぜかといえば、有害鳥獣とは、農林作物及び漁業に害を及ぼすことが原則となるし、これに該当しない場合は、人間の生活に極めて害になる場合に限られるわけである。そうするとウソは有害鳥になりうるかどうかである。筆者はならないと思う。

しかしわずかではあるが、桃や梅の芽を食害することがある。この時はやむを得ないと

思われる（有害鳥といわれることが）。

高田公園のウソはなぜ駆除したか

昨年高田公園の桜はウソのためぜんめつし日本三大夜桜の名称もかたなしとなった（これは新聞報道された文句）。桜を楽しみにしていた上越市民はもちろんのこと、業者は死活問題となっている。これをそのまま放置しておくことは、市の最高責任者の市長として見過ごすことはできない云々……。

これで上越市役所の担当者が市長の至上命令として昭和57年の春もウソに桜をやられたら“クビ、だということになったらしい。担当者はウソの害で困っている（桜の芽を食害する）都道府県をさがし、駆除方法を聞いたりしたが、あまりいい方法はない、最終的には“銃、で殺すのが一番いい方法であるという結論となった。

これに対し新潟県は、色々な駆除方法（駆除とは殺すことではなく、追い払うことも同様である）を指導したが、上越市役所ではいづれも効果なし、銃で殺すより他に方法はないということになり、県にウソの駆除を申請したが、最良の手段ではないからと他の駆除方法を指導したが聞き入れられず、1月だけ許可をすることになった。しかし1月にウソの渡来はなく、またまた理由をつけられ2月に2回目の許可をした。この時に7羽のウソが殺され、前述のとおり“大ニュース、となったわけである。3月もまた許可申請をしてきたが、これは許可しなかった。

ウソ7羽殺したことについては6月ごろまで、新聞の読者欄に投書されたり、実に本年のウソ問題は、最高の鳥ニュースであったと思う。

必要な保護団体の意見

前述した千葉県下のシラサギ問題は、駆除するときに、日本野鳥の会の人々が立会いを

している。新潟県もそこまでやれとはいわないが、保護団体の意見が必要ではなからうか。ウソの生態なども、一番よく知っている人々が会員になっているはずである。

個人的な批判意見は「力、がなく問題にならないことをよく知っていただきたい。

ウソはしかじかの生態をしており、桜の芽は食べるが、それは豪雪で渡来数の多い時であるとか、周期的な渡来の時期をよく把握しておいて、それを市役所へアドバイスしてや

るとか、色々な方法があると思う。

今後はウソに限らず、鳥獣保護の政策が進んでくると、「有害鳥獣駆除、の問題は年々多くなってくるし、現在もすでにその傾向が見えている。我々保護団体はこれらの問題が発生した場合、すみやかに行政または被害者団体に色々アドバイスができるようにしておかなければならないと思う。

やはり鳥ニュースは、昨年のように珍鳥渡来がニュースとなるようにしてもらいたい。

草ダンゴと中学生

私が勤務している中学校は、六日町から東へ8 km、魚野川の支流、三国川と五十沢川の扇状地のまん中に位置し、生徒数200名足らず、6学級の小規模校である。その豊かな自然環境と、そこに学ぶ中学生気質を紹介したい。

- ・雪消えて顔をのぞかせたみずみずしい畑土に陽炎たつ頃 — ヒバリのさえずり。
- ・ゴールデンウィークの頃 — 周囲のしげみからわきあがるカシラダカのお別れのコーラス。
- ・周囲の山々の谷筋がタニウツギの淡いピンクに染まる頃 — オオヨシキリのせっちなさえずりと、カッコウの単調なリズム、遠く山々にこだまするホトトギスの声。
- ・虫の音が一段と賑やかになり秋の深まりを感じさせる頃 — キジが一人前に育ったヒナたちを連れてエをついばむ姿に出くわすこともある。

今年、校地内からは、スズメ、ホオジロ、ヒバリ、ムクドリ、カワラヒワ、キセキレイ、キジバト、アオゲラが巣立っていった。

愛鳥家にとっては、うらやましい環境であっても、そこに生きる中学生にとって、野鳥とは何であり、どの位それらに興味関心を持っているのか、ヨモギ摘みを例にお話したい。

我校では、生徒会費の一部を自分たちの勤

南魚 塩沢町 木下 弘

労によって捻出しよう、ということで、ヨモギ摘みを毎春全校一斉におこなっている。

ヨモギの若芽を摘んで、生のまゝ米袋に10 kg単位でつめこめられ、地元の笹ダンゴ製造業者に渡される。簡単にいえば、ヨモギ→笹ダンゴ→生徒会費という循環によって生徒会の一部が運営されている。このヨモギ摘みが、生徒にとって、どのような自然とのふれあいの場やチャンスになっているのだろうか。

1回の収量は、だいたい1人1時間真剣に摘みとれば5 kgになり、全校では1 tonにもなる。それをシーズン中6回おこなう。

収量の何%かは、部活動毎の収量に応じて生徒会費が配分されるシステムにもなっているので、なんとか集めなければならない。

自分で摘まないで、親や年寄り、さらに親類縁故頼れる者ありとあらゆる知恵をしぼり、電話一本で用を足してしまう。自動車で運搬してもらうので、まったくヨモギにふれることのないチャッカリ生徒もあり、PTAで問題になる。

登校前早起きして、自分でヨモギ摘みをし、若芽の汁が指にこびりついて真黒くして頑強な生徒もいるが、その数は少ない。

ヨモギ摘み中、いろいろな発見もある。

休耕田一面ヨモギが畑のようにはえたヨモ

ギの根元に、まだ抱卵中で温かみのあるカルガモの巣を男子生徒が見つけた。誰がいつ教えてくれたのか親への思いやりで、その場所でのヨモギ摘みをやめ、そっとしておいてくれたのである。

月曜日の朝、大切そうに段ボール箱をかかえてきた女子生徒、ヨモギ摘み中、親からはぐれたらしい生まれてまもないノウサギを持ってくる。母ウサギになったつもりで、エサをあれこれ考え、念入りにスポイトで口に入れてあげる。野生動物は、飼育するより、自然のなかで見守ってあげることが大切だ。と



生徒が見つけたカルガモの巣と卵

いくら説得しても、母性本能のような女子の心は、ゆるがず、ついに粘り強い介抱でその子ウサギは、1ヶ月間も生きのびたのである。

テレビ、マンガなどの情報過多の時代に生きる中学生にとって、身近な野鳥は、一見すると眼中にはないように見えるが、場とチャンスを与えれば、素晴らしいやさしい心が芽生えてくるものだと感じた。



持ってきたノウサギの迷子

たずね鳥

新潟市 佐藤 弘

和名 クロウタドリ

英名 Black Bird

去る5月9日、新潟海浜公園に於ける市民探鳥会の際に、一般参加の方々と見ました。別グループのリーダー小松吉蔵氏がハッカ鳥の1種を見つけた直後だけに、これをハッカ鳥とばかり思っていました。しかし後で伺うとハッカ鳥には前方にカールした冠羽があり、羽毛も黒1色ではないとの事で私の見たのとは違います。

その後忘れかけていたところへ、5月27日

「野鳥」6月号が届き、野鳥情報欄に本種がのっているのを見て「これだ」と大声を出してしまいました。すぐに300%を持ってとんで行きましたが、20日近くも過ぎているのですからいる訳がありません。

(体形) ツグミ形

(大きさ) ムクドリよりやや大、ハムリンのBird of Britain and EuropeではL25、

(色彩) ツヤのある漆黒ではなく灰色がかってクロサギのよう。クチバシは黄色、足は汚れた黄色。ハムリンでは黄色のアイリングが目立ちますが、観察では早朝である事に加えて距離がある為か印象に残っていません。

(鳴き声) 聞かなかったように思います。

距離約50m弱いながらも順光で、クロマツ

の幹から突出した枯枝にとまっていた。特筆すべきは約2分間の観察中微動もなかった事です。クロマツの樹皮を少し濃くした色合いの、この場合保護色と言えそうな羽毛で、頭さえ動かさずに左側面を見せたまゝでした。これだけの距離があり、かつ数m先の

地上でムクドリが採餌しているのに、よほど警戒心が強い様です。目を離れたスキに草むらに降り見失いましたので、飛ぶところ歩くところは見ずじまいでした。珍鳥のようですので、貴重な紙面をお借りして会員諸兄にお知らせするものです。

(報告) 亜高山の野鳥を見る会

糸魚川市 伊藤卓夫

6月26~27日に蓮華温泉にて10名の参加者で行われました。今回は「蓮華を愛する人の山の集い」と重なり、思わぬ特別サービスが出ました。岩魚の骨酒や赤飯のおにぎり、ヤカンから注いだ生ビールの味は良き思い出。「来年もぜひこの日にしましょう」と一同大喜びでした。

夜8時より予習会、この地で記録された野鳥53種の確認場所と個体数の紹介、録音テープによる亜高山鳥の鳴き声学習など。「山の集い」に参加されていた糸魚川市商工観光課の室川さんをお願いして、周辺の整備計画と山にまつわる珍しい話をうかがう。この折、山本副支部長さんをはじめ一同で、蓮華を観光地化しないように要望しました。

翌27日は雨、雨、ウーン残念。早朝より小屋の中で鳴き声をきく。日程を変更して、野鳥の情報交換や日頃不明な点などを話題に室

内で行ないました。探鳥会とは違った趣で楽しい半日でした。

下山後、大雨で北陸線一時不通だった事を知りました。国鉄利用で参加された方々、大変ご苦労様でした。

＜確認した鳥＞ ジュウイチ、ツツドリ、ホトトギス、キセキレイ、ミソサザイ、コマドリ、コルリ、マミジロ、トラツグミ、ウグイス、メボソムシクイ、キビタキ、オオルリ、コガラ、シジュウカラ、クロジ、カケス、ハシブトガラス、(下山中ヒワ平にて)アマツバメ、イワツバメ、(白池にて)カイツブリ、カルガモ、コゲラ 計23種

〔参加者註〕伊藤さんは1日目の夜と、雨で出かけられなかった2日目の午前、自分で録音したテープで、すばらしい鳥の声や蛙の声などを聞かしてくれました。また録音の取り方や苦心談なども話してくださいました。



蓮華温泉より望む天狗の庭
(案内板の上方、雲との境目あたり)

＜鳥だより＞1 (新潟市 佐藤弘)

サンコウチョウの繁殖 — この夏、新潟青山海岸の保安林でサンコウチョウが繁殖しました。場所は通称帝石野球場の脇で、以前にコゲラが繁殖した所の近くです。本間隆平氏によれば、新潟海岸での本種の繁殖確認は初めてのことだそうです。

ここはクロマツ林に、エノキ・ヒョウタンボク・ツタ・そしてネム等が混じり、いい林相になっていますので、本種が増えることを期待できそうです。

コバギボウシ

東頸 松代町 関谷 八郎

湿地にはえる多年草。総状花序は、直立して約30花をつける。つぼみは細長くやや先がとがる。花は長さ約5cmでロウト形に開き、6本のオシベが突き出ている。さく果は長だ円形でじゅくすと3片に裂開し、黒色の種を出す。花期7—9月。——と図鑑に記してある。

このコバギボウシが、我が家の裏の田の湿地に咲いていた。

なぜこんな所に、こんなきれいな花をつけた野草が根づいたのだろうか。誰も移植したこともなければ、今までにこの場所で見たとことはなかった。

我が家の裏は、50mはなれたところに、お宮様の森があり、その間に田がある。

湧水が出ているところがあり、そこへこのコバギボウシが咲いていたのである。

湧水の場合は、カラスの水呑場だと娘が云う、カラスだけでなく小鳥達の水呑場でもあるのだと思う。

野鳥が、水呑み、水浴をする場所となればこのコバギボウシは、野鳥が運んでくれたものと思う。

我が家の家族は、みんなかけ出しではあるが、妻は植物、小



コバギボウシの花

生は野鳥に恋をしている。このコバギボウシも妻がみつけて来た。娘は、この花を写真に撮っている。

名前を知るにも、図鑑を3人でひろげて、やっとみつけることが出来た。

前にも云ったように、野鳥が運んでくれたものなら本当にうれしく思うし、この花の強さにも感心させられる。

野鳥観察をするために、冬、餌台を作って毎朝餌をやっていた。もちろん窓からみえるところに置いてみた。

スズメが一番早く来て、あとヒヨドリが来た。雪が降りとまった頃になると、キジバトそしてムクドリがやって来た。

春も遅いある日、スズメと一諸に黒っぽいのが一羽まじっていた。

スズメのように激しい動きでもなく、木の枝にしばらくとまっていた。双眼鏡を片手に図鑑を開いてみた。

クロジである。本種は、34年に高沢十四雄氏が飼育して4月に放鳥したという記録があるだけだった。冬期の調査はやっていなかったもので記録にもっていなかったわけだが、餌台のおかげでめずらしいものがみられたというわけだ。

コバギボウシを運んでくれたのが、もしやクロジでは……なんて手前勝手な想像をしている。

<鳥だより> 2 (上越市 古川弘)

ハマシギの越冬 '81年~'82年にかけて、直江津港の一角でハマシギの越冬を観察した。12/21、10羽、1/25、10羽、2/6、10羽、3/6、6羽、を同じ場所で。

朝日池にマガンとハイイロガン マガン

はこれまで1~2羽程の渡来だったが、今冬は19羽(2/11観察)。ハイイロガンも1羽渡来(2/19と2/23に観察)。これ以前に福島潟に渡来したのと同じ個体か。

ハチジョウツグミ '82・2・11柿崎町直海浜で1羽観察。

行事のお知らせ(2つ)

晩秋の水鳥探鳥会

日時：11月7日(日) 小雨決行

場所：佐潟(新潟市赤塚)

(2ヶ所) 朝日池(中頸城郡大潟町)

◇集合地：いずれも下記現地に10時まで

・佐潟一赤塚中学校前(中学校に駐車可)

バス 下車 徒歩 分

・朝日池一現地池端道路西方小屋附近

国鉄信越線潟町駅下車徒歩20分

◇携行品：双眼鏡、望遠鏡、図鑑、筆記用具

手帳、昼食、防寒具、雨具など

◇解散13時(予定)

◇その他不明の点は下記へ問合せ下さい。

佐潟 石部(0252-61-1416)または

事務局 渡部(02549-2-5045)へ

朝日池一小林(02572-3-9063)または

山本(0255-24-6881)へ

春の総会では1泊2日で鳥屋野潟と福島潟(標識見学)と決めましたが、佐潟の方が変化があること、福島潟ではステーション増築のため今秋は標識は行わないことなどのため変更しました。なお11月7日は日本野鳥の

会が「'82バードウォッチング・ウィーク・キャンペーン」の一環として、第6回全国一斉公開探鳥会を開催する日であります。マスコミにも報道されて一般の人や子供などの参加もあると予想されます。

発表・報告と懇親の集い

日時：11月28日(日)10時~15時

の間発表会、15時より懇親会

場所：新潟市

・研究発表、スライド・8mm映画・録音などの発表、自然保護活動の報告など。

・研究発表・活動報告は1人15分以内。

スライド・8mm・録音など10分以内。

・研究発表・活動報告は1人15分以内。

スライド・8mm・録音は10分以内。

(発表する人数により伸縮あり)

・発表・報告希望の方は、類別、題名などを事務局へ葉書か電話で11月20日まで。

・会員外の参加歓迎、また懇親会のみ参加も可(忘年会を兼ねる)

以上2つの行事については、改めて案内を出しませんのでご承知おき下さい。

事務局連絡

◎秋の探鳥会へふるって御参加下さい。

◎昭和57年度会費未納の方大至急納入下さい。

¥1,500円です。

◎10月に東京で中級指導員講習会が開かれますが支部からは2名が参加予定です。

初級リーダー講習会を支部でも開催します。

無断転載禁じます。

〔編集後記〕今年の夏は暑い日があまりない状態で過ぎようとしています。鳥たちの繁殖の営みも終り、おなじみの林や草原は一時静かになります。そしてまたシギ・チドリがやってきます。北国の繁殖地と、南国の越冬地との行き帰りに日本を通過してゆくこの放人ならぬ旅鳥に、他の鳥とは違った趣きを感じます。繁殖地や越冬地での生活を見てないという未知の部分を持つものへの魅力でしょうか。

地球の緑が次第に失われて砂漠化が進み、日本列島も開発が進んでこの鳥達が立寄る環境が少なくなってゆく中で、運命共同体としての「青い地球」を思わずにはられません。

(編集担当 山本 明)